

# 宝巻による「割股療親」孝行の推進について

徳 永 彩 理

- 一 はじめに
- 二 割股療親説話の出てくる宝巻
- 三 割股する孝子や孝女を支持する神々
- 四 割股は大孝である
- 五 割股する孝子や孝女の因縁
- 六 おわりに

## 一 はじめに

魯迅は『狂人日記』で「たしか、あれはおれが四つか五つのときだった。母屋の前で涼んでいると、兄貴がこんなことをいった。親が病気になったときには、子たるものは、自分の肉を一片切り取って、よく煮て親に食べさせねばならぬ、それでこそりっぱな人間といえるのだ、と。母も、それがいけないとはいわなかった。」と述べている<sup>1</sup>。

この作品をリアリズム文学だとするならば、中国では親が病気になったら子供が自分の肉を切り取り煮て食べさせていた時代があったことを、魯迅がわれわれに教えてくれているのだと思う。だとすると、桑原隲藏が史書から豊富な例を引きながら、「父母の為、若くば舅姑の為め、自己の股肉を割いて供した所謂孝子孝女は、唐宋以後の正史野乘を始め、各地方の通志、府県志等に登見して居って、一々列举するに堪えぬ。」<sup>2</sup>と言っているのは、そのことの歴史的証明ともなる。ただ、誰もが気になるのは、そこに書いてあるから即ち事実だと言いきれるのかという点であり、だから、後世のわれわれが知ることができるのは、少なくとも中国では、この行為を積極的に書き残そうとする態度があった、ということだけである。もっとも、孝子や孝女が割く身体

<sup>1</sup> 魯迅「狂人日記」(『魯迅』、世界文学全集35、松枝茂夫／和田武司訳、1980年5月、第4刷、講談社、p.23)。原文は1918年4月(大正7年)「新青年」に発表。

<sup>2</sup> 「支那人間に於ける食人肉の風習」(『桑原隲藏全集』、1968年、岩波書店、p.197)。初出は大正13年3月『東洋学報』第14巻第一号。氏は、上記を医療目的の食人例として挙げ、他に1) 飢饉、2) 籠城、3) 嗜好品、4) 憎悪の計5つの目的を指摘している。

<sup>3</sup> 邱仲麟によれば、『古今圖書集成』の「学行典・孝弟部」及び「閩媛典・閩孝部・閩義部・閩列部・閩節部」の2470件中、股肉：大多数、臂肉：140、肝臓：85、胸・脇・乳：46、指：10、ほかに心臓・肺・眼・脳・首・骨・膝・断腸・頭肉などが見られるという。「不孝之孝—唐以來割股療親現象的社會史初探」『新史學』疾病、醫療與文化專號、第六卷、第一期、1995年3月。ほかの部位はいざしらず、心臓や脳を失ってもなお生存した孝子や孝女のはなしは、われわれには信じるのが難しい。

の部位は、必ずしも股肉だけとは限らず、身体のさまざまな部位に及び<sup>3</sup>、両親や祖父母のためだけではなかった<sup>4</sup>。また、この風習の起源について、一般的には唐代の医者陳藏器が『本草拾遺』に「人肉治羸疾」と書いたことに始まる<sup>5</sup>といわれるが、唐以前の記録も見つかっているため<sup>6</sup>、いまのところ唐代以前にもあったが、盛んになったのは唐代以降だといえるにとどまる。この風習がどのようにして始まったのかについても諸説があって、中国に古くからあった人部薬の伝統<sup>7</sup>や、印度仏教説話の伝播を通じて捨身供養<sup>8</sup>という概念が中国にもたらされたこと、また唐代に普及した孝思想の影響<sup>9</sup>などが言われているがはっきりしない。ただ、子供の病気治療のために親が割股療親する記録は見つからないため<sup>10</sup>、この行為がただの病気治療としてなされたのではなく、親孝行や貞節などの思想性をもった特別な治療行為であったことは間違いない。史書などを見てもこの奇妙な風習にはとくに定まった呼び方がなく、食べさせる相手や切り取る部

<sup>4</sup> 血縁関係にある父母と子女、祖父母と孫や孫娘、叔父と甥、姪などの他、婚姻関係で結ばれた舅姑と嫁、大舅姑と孫の嫁などの多元的交叉状況がある。さらに、庶子が嫡母に、嫡子が庶母に、前夫の子が継父に、前妻の子が継母に、嫁もまた夫の家の長輩に割股するほか、奴僕が主人や主母へという例もある。(邱仲麟「人薬與血氣—「割股」療親現象中的醫療概念」『新史學』身體的歷史專號、十卷、第四期、1999年12月、pp.100-110)

<sup>5</sup> 『新唐書』卷195孝友伝序文「唐時陳藏器著本草拾遺。謂、人肉治羸疾。自是民間以父母疾、多割股肉而進。」

<sup>6</sup> 晋の時代に、杜世寿という人が母の病気を割股療親して治し、旌表されている。『古今圖書集成』理學彙編、學行典、第181卷、孝弟部、名賢列伝三之一。また、隋代の陳果仁という人が母に割股療親して旌表されている。長澤規矩也編『日記故事大全・卷三』(『和刻本類書集成・第3輯』、1976年、汲古書院、p.268)および、邱氏によれば『咸淳重修毗陵志』卷19「人物四・旌表」上-下(『宋元地方叢刊』、1980年、大化書局、3630頁)にも同人物の割股療親及び旌表の記録があるという。

<sup>7</sup> 先秦時代の医書といわれる『五十二病方』には、人の毛髪や頭垢、分泌物や排泄物、死人の骨などの処方載るが、身体を傷つけて採取する薬用処方がない。村上嘉實「五十二病方の人部薬」(『新発見中国科学史資料の研究・論考篇』、昭和60年、京都大学人文科学研究所)参照。

<sup>8</sup> 仏教説話には仏菩薩の前世譚において、親だけでなく比丘や動物に自分の身体を与えて飢えや病気を癒す物語があるが、説くのは捨身による無我の境地の獲得である。中国に伝来してから捨身供養の目的が治療へと転換した可能性はあるが、その転換がいつどのように起きたのかはまだはっきりしていない。

<sup>9</sup> 親への孝行だとしても、孝思想がもつづく『孝経』などには、孝子の条件は親から受けついで身体を保持することと説くので、身体を傷つけて行なうこのような行為をいったいどの時点から孝行と認定するようになったのかはよく分からない。また梁音は、『莊子』の盜跖篇に介子推が文公に股を割いてその肉を捧げる「介子推至忠也。自割其股。以食文公」を引いて、「漢以前には「忠」思想の表現として「割股」の行為が考えられており、これが「孝」の行為としても容易に転用し得るものであることは想像に難くない。」(『清代の孝子説話資料『孝行録』解題—「王武子妻」孝行説話における「食人肉」行為をめぐって」(『名古屋大学中国哲学論集』2、2003年、名古屋大学中国哲学研究会、p.16)と推察している。

<sup>10</sup> 下見隆雄は、儒教社会を母性の観点から分析して興味深い考察を行なっているが、「注目すべきは、子に対する母には、妻・娘のように、身を殺すことは無いように思われることである。(中略)儒教社会の思想的背景のなかでは、孝の実践を教導要請する母が、子ひとりのために身をすてるという発想はそぐわないのであろう。母はそのほかの多くの子の母として、かれらに孝を教導する責任を担っていても、同時に妻である立場においては、一方的に従って己が身を捧げる対象は、夫でなければならないからであろう。」(『孝と母性のメカニズム—中国女性史の視座—』1997年、研文出版、pp.272-273)と述べており、これは邱氏によって次のように報告された女性達の割股療親の相手の内訳を見ても分かる。『古今圖書集成』「閩媛典」中、1205人の割股孝婦のうち、父母、祖父母へが228人(18.9%)、舅姑へが690人(57.3%)、夫へが310人(25.7%)、これらを3種あるいは2種重複する者が44人(『不孝之孝—隋唐以来割股療親現象的社会史考察』、国立台湾大学歴史学研究所博士学位論文、1997年、p.22)。こうしたことから、親による子供の病気治療のための割股というのは、絶無とはいえないかもしれないが、まずなかった、あったとしても記録されなかったとみてよいようだ。病気治療ではないが、子供を残していくに忍びず、乳を割いておいていった母の記録がある。「按唐書、列女伝、李孝女者…聞父亡、欲間道奔喪、一子不忍去割一乳留以行、既至父已葬號踊請開父墓以視、宗族不許復持刀刺心、乃為開見棺舌去塵髮治拭之結廬墓…」(『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第32卷、閩孝部、列伝一之十、唐)。(訳：李孝女という人は父が亡くなったと聞き、急ぎ帰郷して服喪しようとしたが、一子を置いていくに忍びず乳房の一つ割いて留め、駆けつけると父の葬儀はすでに終わっていて宗族らが墓を開くことを許さなかったので、刃物で心を刺すとやっと思えることを許され、舌で棺の塵を取り、髪で払って廬墓し…)これとても、同じ一人の女性の、子に対する母としての態度より、父の喪に服するという孝道のために、子を犠牲にする娘としての行動が評価記録されていると見てよい。

位によって様々によばれる<sup>11</sup>。そのため、筆者はここでは便宜上、身体部位や相手にかかわらず、病氣治療のためにわが身の肉を切り取って食べさせる行為を、「割股療親(かっこりょうしん)」と統一してよぶことにする<sup>12</sup>。

さて、桑原氏の証明を受けて、こんどはその割股をした孝子や孝女が、どこにどれくらいの数があったのかについて統計をとる人がでてきた。下の数字は、邱仲麟氏が各省通志における唐から清までの割股療親者数を統計した表<sup>13</sup>のなかから、筆者が明清両時代の割股療親者だけを取り出して示したものである。

明代	男性	1195人	女性	600人
清代	男性	2226人	女性	3328人

これをみると、清代になって女性割股療親者数が大幅に男性を上回るようになったことが分かる。邱氏はほかに、清代に編纂された府志や、清代以降に編纂された州志および県志からも割股療親者の男女比と地域性をみるために統計をとり、それらを総合して、明代では男性が女性よりも多い傾向にあるのに、清代になると少数の例外はあるが、いずれも女性が多くなると報告している。その理由として、明代以来、婦女子の貞節や孝行が重視され、男は外で家計を支え、家庭内は女の領域という社会風潮が生まれ、割股療親は女がになう領域とする考え方が広まったことや、府州県志を編纂する立場にある士大夫が女子の貞節行為に強い肯定感を持つようになり、多くの地方志に婦女道德事例の大量の採録が積極的に行われたことを挙げる。一方、地域性の問題について邱氏は、通志、府志、県志のいずれの統計からも、「北枯南榮」の状況が見られるとのべ、そのうち、華中地域の江蘇、浙江、安徽、湖北の府志ではいずれも数百人以上の採録があり、こうした地域では割股療親が盛んであったと報告している。ではなぜ、華中地域の割股療親者が多いのかについては、その一帯に礼教や孝道観念を重んじる特別な文化的背景があったと指摘する。ただ、小林義広氏もすでに述べているが、礼教や孝道観念の指導者かつ実践者でもある士大夫たちは当初、割股療親を孝行とは考えていなかった<sup>14</sup>。それどころか、『孝経』の有名な言葉「身体髮膚、受于父母。弗敢毀傷、孝之始也。」(『孝経』開宗明義章第一)<sup>15</sup>に照らし、たとえ親の

<sup>11</sup> 例えば「割股膳母」(『新唐書』列伝卷195、列伝第120、孝友、章文益)、「割肉救夫」(『新校本明史』列伝卷301、列伝第189、列女一、程氏)「割臂療父」(『新校本明史』列伝卷295、列伝第183、忠義七、許琰)

<sup>12</sup> 「割股療親」の「親」は、父母だけでなく身内や親類、さらに婚姻関係で結ばれた者も指すことができるので採用した。『中日辞典』(2003年、小学館、p.1178)および『全訳漢辞海』(2001年、三省堂、p.1276)参照。

<sup>13</sup> 邱仲麟『不孝之孝—隋唐以来割股療親現象的社会史考察』(国立台湾大学歴史学研究所博士学位論文、1997年 pp.7-9)。氏が統計した通志は、(1)『雍正河南通志』、(2)『雍正陝西通志』、(3)『雍正甘肅通志』、(4)『雍正浙江通志』、(5)『乾隆江南通志』、(6)『乾隆統河南通志』、(7)『乾隆貴州通志』、(8)『嘉慶四川通志』、(9)『嘉慶広西通志』、(10)『道光廣東通志』、(11)『道光福建通志』、(12)『同治畿輔通志』、(13)『光緒安徽通志』、(14)『光緒江西通志』、(15)『光緒湖南通志』、(16)『光緒山西通志』、(17)『光緒統雲南通志稿』、(18)『宣統山東通志』、(19)『宣統湖北通志』、(20)『民国統修陝西通志稿』。以上清から民国までに編纂された20種。

<sup>14</sup> 韓愈(768-824)、蘇軾(1036-1101)ら士大夫たちは『孝経』などをふまえて割股療親は不孝な行為として批判的に考えていた。ただし柳宗元(773-819)だけは割股孝子に文章を送って顕彰している。小林義広、「宋代の割股の風習と士大夫」(『名古屋大学東洋史研究報告』19、1995年3月、名古屋大学東洋史研究会、pp.92-94)。

<sup>15</sup> 訳文「わが身体は両手・両足を始め毛髪・皮膚の一切に至るまで、すべて父母から戴いたものである。いわばわが身体は両親の遺体である。この大切な遺体を善く守ってわけもなくいため傷つけないように心がけるべきである。それが孝行の始めというものである。」栗原圭介『孝経』(平成7年、明治書院、p.78)。

病気であっても身体を傷つけておこなう治療は不孝であると批判していた<sup>16</sup>。ところが、時代が下って南宋になると士大夫の中にも割股療親を好意的にみる者があらわれ始め<sup>17</sup>、さらに下って明清時代になると、ついに割股療親を実践する士大夫さえ現れるようになる<sup>18</sup>。こうして時代を経るにしたがって、階級を問わず社会全体に割股療親という風習が認知実践されていく過程には、明清になって発達した通俗的な孝行読本<sup>19</sup>や善書などの宗教的な書物の普及が影響を与えたという。文字を理解しない民衆にとっては、孝行をテーマにした観劇や説話を聞くことでも割股療親の知識を得ることができた。そうした民間に普及していた文芸の一つに宝巻がある。宝巻はかつて華中地域の民間で盛んに行なわれた説唱文芸であり、特に婦女に好まれたという。宝巻に割股療親説話が見られることは、先行研究でも報告されているが、これまで宝巻が割股療親という孝行を民間に推進する媒体になったという観点から取り上げたものはないようだ。筆者は、宝巻に見られる割股療親説話の分析を通じて、当時の民衆の割股療親に対する受容態度がどのようなものであったかを考察する。

## 二 割股療親説話のでてくる宝巻

宝巻は、はじめは説唱するための台本であったのが、のちに人気のある話は刊本の形で大量発行されるようになり、読み物としても民間に広く普及した。この宝巻が民衆に提供する知識というのは、仏教や道教の教義や本尊の因縁譚、修行譚などにまつわるもので、因果応報によって落ちる地獄の有様などが詳細に語られるのである。宝巻の研究は、鄭振鐸が民国27年(1938)に『中国俗文学史』下巻でとりあげたのを始めとして、日本では澤田瑞穂が昭和38年(1963)『宝巻の研究』において、鄭振鐸の扱ったもの以外の資料をも含んだ詳しい解説を行なっている。これら先

<sup>16</sup> 割股を批判するとき、韓愈の「鄆人対」(『韓昌黎集』外集卷四)がよく引用される。小林氏の訳を参考に大意をまとめると、鄆という土地出身の士大夫が、郷里の人が割股療親して賦を免除されたと自慢したところ、韓愈は批判して、こうした行為には根拠も道理もなく、万一死亡すれば子孫を絶やす大不孝であり、またこれを旌表すれば割股しない人を孝行でないと決めつけることになって租税逃れも発生するの、この行為を罰しないため政治に汚点を残してしまっているというもの。(小林前掲書、p.92)

<sup>17</sup> 小林氏は、北宋にみられた批判的態度からは一変して、南宋になると士大夫たちは肯定的見方に転換してゆくとい、かれらの解釈は、割股療親は伝統的儒教概念には反するが、真摯な孝心は評価できるというものであり、これは南宋の士大夫たちが孝觀念の強化を通じて民衆の教化をはかったためだと述べている。(小林前掲書、p.102) また下見氏は『孝経』や『礼記』祭義篇、『呂氏春秋』孝行篇などの親の遺体である身体を保つという教えには、「親との関わりのない場での、己個人の私有としての身を軽んじ用いるなどということであって、これを伴う親への奉仕行為までも厳密に含めてはいないのである。」(下見前掲書、p.65)と述べ、親のための自己犠牲である割股療親は儒教の教えとは衝突しないと述べている。

<sup>18</sup> 邱氏によれば、唐宋には平民を中心に行なわれた割股療親は、明清になると、生員や監生階層及び儒者で割股する者が全体の約二割に達し、そうした階層出身の女性割股者も三割近くを占めるようになった。それは、この時期の社会低層にいた読書人達が経済的に困窮しており、親の病気に際して出来ることが平民と比較しても差がなかったためではないかと分析する。(邱前掲書、1997年、p.54)

<sup>19</sup> 元の郭巨敬編『二十四孝』の孝子には割股療親する者はいないが、黒田彰氏によれば、『二十四孝』は古くから伝わる孝子伝を母体として、1)全相二十四孝詩選系、2)日記故事系、3)孝行録系の三系統に分かれるといい、3)孝行録の系統に割股療親説話が王武子として採録される。黒田彰「二十四孝の研究」(『孝子伝の研究』、仏教文学鷹陵文化叢書5、2001年、思文閣)。金文京「『孝行録』の「明達亮子」について—「二十四孝」の問題点—」(『汲古』15、平成元年6月、古典研究編、汲古書院)や、橋本草子「『孝行録』と『全相二十四孝詩選』所収説話の比較—二十四孝図研究ノートその二—」(『人文論叢』44、平成8年1月)は、この王武子妻説話が、敦煌変文から始まり、中国北方で流行して『孝行録』につながったと考えており、敦煌本『孝子伝』や『搜神記』にこの説話の淵源があると述べている。

人の研究のうち澤田氏の宝巻の研究をまとめると以下ようになる。

- ・明清から近代に至るまで、中国民間の仏教・道教および新興宗門の方面で用いられた唱導的・通俗的な文芸の一様式である。
- ・唐五代の俗講に用いられた変文<sup>20</sup>の系統を引き、仏教の教理や一經典の趣旨あるいは一本尊の本縁を大衆に演釈して聞かせるため、それを宣巻と称する宗教的儀式を場として、一定の型と順序に従って平俗に講解宣唱したものである。
- ・文体は、散文の講説部分と韻文の吟誦歌詠の部分とが錯雑交替するように組織された、説唱体文学の一種である。
- ・内容は、教義を展開するもの、因縁譚や修行譚などの物語をもつもの、または単に歌曲だけを唱和するものなどがある。
- ・特に女性を主人公として、その生涯の受難と修道とを叙し、女人成仏を説くものが多い。
- ・明代に無為教を開いた羅清が教派経巻を編んで宝巻の全盛期をつくったが、その後の宗教抑圧政策で宝巻も衰退し、体裁も単純化され、清代末期には題材も小説・弾詞・演劇などで広く大衆に愛好される物語を改作して、全くの娯楽読み物となり、小冊子の形で営利出版されるようになった。<sup>21</sup>

宝巻は当初、主として尼僧によって語られ、聞き手もまた女性達であり、場所は尼庵や閨中であつたという。その後清末になって宣巻の方法や曲調が固定するにしたがって、俗人の中からも達者な者が現れて、宣巻人として職業化した。この流行地域は、蘇州・無錫・杭州・上海・紹興・寧波などの江浙一帯の都市郷村であつたという。また、最初明代では都市の上流階級の大口の寄付による豪華本の刊行が主流であつたのが、清代の宗教禁圧後は、地方や農村に住む中産階級以下の小口の寄付による安価な出版物になっていき、清中期以降は、宝巻もほかの仏書・道書とおなじく「善書」の一種として全国各地の寺廟や善書局で刊行されたという<sup>22</sup>。李世瑜氏の『宝巻総録』には、氏がおこなった刊行所の調査がある。それを多い順に挙げてみると、上海23、

<sup>20</sup> 敦煌の莫高窟で発見された変文のなかに、敦煌本孝子伝とよばれる資料(P.3680V)があり、それには割股療親説話が残っていて、以下のように、嫁が夫の留守中に姑に割股療親をする話である。「王武子者、河陽人也。以開元年中征涉湖州、十年不歸。新婦至孝、家貧、日夜織履為活。武母久患勞(癆)瘦、人謂母曰：「若得人肉食之、病得除差。」母答人曰：「何由可得人肉？」新婦聞言、逐自割股(「股」か)上肉作羹、奉送武母。母得食之、病即立差。河南尹奏封武母為國太夫人、新婦封郢郡夫人、仍編史冊。開元廿三年行下。詩曰：武子為國遠從征、母病瘠人肉始輕、新婦聞之方割股、阿家喫了得疾平。」潘重規『敦煌變文集新書』〈下〉、p.1266(敦煌學叢書6、民國73年1月、中國文化大學中文研究所敦煌學研究会)。(訳：王武子という者は、河陽(河南省孟県)の人。開元年間(713-741年)に湖州(浙江省)に巡視にいったまま10年間帰らなかつた。新婦は至って孝行で、家が貧しく、日夜靴を織って生活した。武の母は長く癆を患って痩せ、人が母に「人肉を食べれば、治るかも知れない。」と言うと、母は「どうして人肉を得ることができようか?」と答えた。新婦はこれを聞いて、遂に自分の股の肉を割いて羹を作り、武の母に捧げた。母が食べるとたちまち治つた。河南の長官が上奏して武の母は國太夫人に封じられ、新婦は郢郡夫人に封じられ、史冊に編まれ、開元23年(736年)に頒布された。詩に曰く、「武子は國のために遠征し、母の病は人肉食べて軽くなる。新婦は聞いて股を割き、姑は食べて治癒をした。」)

なお梁氏は、金代の墓石に残る「輒彫」にこの王武子妻像を形象化したものがあると報告しており(山西省考古学研究所『平陽金墓輒彫』1999年、山西省人民出版社)、その像が股ではなく臂を割くしぐさをしていることから、当時は、今では失われた臂を割く説話が存在していた可能性があるとして述べている。(梁氏前掲書、p.19)

<sup>21</sup> 澤田瑞穂『増補宝巻の研究』(昭和50年6月、図書刊行会) pp.95-96。

<sup>22</sup> 澤田前掲書 pp.75-76

杭州10、寧波12、北京7、蘇州5、常州4、南京2<sup>23</sup>とつづき、ほかに地名の未判明な個人の刊行も含めれば、実際には上記の数よりもっと多くの場所で刊行されていたという。これによれば、江蘇省や浙江省にこうした刊行所が多かったことが分かる。

宝巻の概要は上記のようであるが、数百種類を有する宝巻のうち、筆者が見ることのできたいくつかの中に、割股療親を語るものが少なくないことが分かってきた。宝巻のなかでは割股療親行為は全面的に肯定され賛美される。澤田氏が述べているように、宝巻は主人公の得度成仏に主題を置いているから、彼らは現世で辛酸を舐めなければならないが、その苦行の一つとして割股療親場面が出てくるのである。主人公は女性に限らず、男性や子供も割股療親する。そして、割股療親する主人公のもとには、きまって神々がよりそい、割股の方法を教えたり<sup>24</sup>、割股したあとの傷の手当てをして主人公を保護するので、主人公は割股どころか、割肝、割心してもなお死ぬことはない<sup>25</sup>。というより、正確にはまた天によって還魂させられる。そして、割股に感動した神は、病気の原因である鬼を追い払って親を治してくれるばかりでなく、割股療親した孝子の村にだけ恵みの雨を降らせたり、豊作をもたらすなどの超常現象を起こして、孝子や孝女への称賛を周囲に示すのである。

ここに、筆者がこれまで見ることのできた割股療親話が出てくる宝巻を次のように表にまとめる。表は書名のあいうえお順で並べる。

	書名	刊行年等	地域	出版元	収録書籍名
1	延寿宝巻	清刻本 <sup>26</sup>	常州	常郡楽善堂善書局	『民間宝巻』 <sup>27</sup>
2	女延寿巻	清刻本 <sup>28</sup>	不明	不明。	『民間宝巻』
3	郭三娘割股賢孝巻	不明。乾隆年間の江蘇省淮安府が舞台。	不明	不明。抄本。	『民間宝巻』
4	回郎孝心宝巻	不明	不明	抄本	『民間宝巻』
5	回郎宝巻	光緒19年(1893)	蘇州	瑪瑙經房	『民間宝巻』

<sup>23</sup> 李世瑜『宝巻総録』(1961年12月、中華書局) pp.11-12、序例。

<sup>24</sup> 『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第36巻、閩孝部、列伝五之七、明四、陳氏女には、10歳の子供が夢で神から割股について教えられ母に割股療親したという。「按宿遷県志、陳氏女、年十歳…母病篤、夜夢神人教以割股、旦日割烹食母、母病尋愈。」

<sup>25</sup> 地方志の記録では、割股療親した孝子や孝女で命を落とした人も少なくはない。『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之四、明二。姑が病気になりさきに夫が割股療親して治したが、三年後に再発し、夫の意を汲んだ妻が割股療親すると死んでしまい、郷人はみな惜しんだという。「潘鴻妻葛氏。按歙県志、葛氏、岩鎮文学潘鴻妻。鴻母病、鴻割股和劑愈。三年復発、葛感夫意、亦割臂籲天請以身代及死、郷人多惜之。」また『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之六、明二には、姑が病気になったが、夫は貧しくて医者も呼べず、嫁が割股療親すると治ったが、傷がもとで亡くなってしまい、姑も嫁の死を悲しんで起きられなくなり、村人もこれを悲しんだという。「余謂道妻李氏。按銅陵県志、李氏、余謂道妻。事孀姑盡孝、姑疾篤、夫貧不能延医、李籲天願以身代、潜持刀割肝煮羹飼姑疾少愈、究以過傷死、姑亦痛媳卒不起邑人悲之。」また、割股療親に失敗して悔やみ、病気になったり、自殺してしまう人もある。『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之十、明二。姑に割股療親してすぐ治ったのに、後に亡くなり、嫁は悲しんで病気になって死んでしまい、邑令はこれを旌表した。「張兆璉妻黃氏。按儀真県志、黃氏、張兆璉妻。…黃焚香祝天割股煮湯進之立愈、後姑没、黃亦悲号成疾死、邑令旌之。」また『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之九、明二には、12歳で母に割股療親したが母が亡くなると絶食して亡くなったので、県令はこれを旌表をした。「吳卯女。按天長県志、吳卯女、父三遷太学生女。年十二于萬曆四十三年、割股救母未幾母亡、女亦不食而死、県令旌之。」

<sup>26</sup> 『民間宝巻』(2005年、黄山書社)第16冊 p.民16-667を参照した。年代不明。

<sup>27</sup> 周燮藩等主編『中国宗教歴史文献集成・民間宝巻巻』(2005年、黄山書社)全20冊。

<sup>28</sup> 『民間宝巻』第17冊 p.民17-63。光緒壬午年(1882)河東衛氏抄本影印本。

6	葵花宝卷	光緒2年(1876)重刊	杭州	瑪瑙寺経房	京都大学人文科学研究所収蔵本
7	玉英宝卷	清刻本 <sup>29</sup>	浙江	不明。越郡剡北重刻とあり	『民間宝卷』
8	魚籃宝卷	不明	不明	不明。抄本。	『民間宝卷』
9	香山宝卷	同治壬申年(1872)重鑄	浙江	杭城宝善堂蔵板	『宝卷初集』 <sup>30</sup>
10	孝心宝卷	光緒13年(1887)	常州	府廟培本堂	『宝卷初集』
11	十二円覚	宣統元年(1909)新刻	上海	上洋翼化堂	『宝卷初集』
12	八宝延寿卷	不明。明代の湖広省通城県が舞台。	不明	不明。抄本。	『民間宝卷』
13	福縁宝卷	1915年 <sup>31</sup>	上海	文益書局石印	『民間宝卷』
14	輪廻宝伝	民国3年(1914)重刊	湖北省	沙市文善堂	
15	学童日記	光緒辛丑年(1901)鑄	江蘇省	丹陽文星堂蔵板	『宝卷初集』

上記は筆者が見ることができた印刷物のひとつであり、同一主題で別時代や別の発行所で刊行されているものも多い。李世瑜氏のまとめた『宝卷総録』によれば、上記の宝卷のうちで時代が古く種類がもっとも多く残っているのは、9の『香山宝卷』であり、主人公の妙善公主が父・妙莊王の命にそむいて結婚を拒否して出家すると、怒った父によって寺を焼かれ、妙善も殺される。冥界に行くも蘇生して香山で修行していると、父が病におかされていることを知って、自分の目と手を父に与えて救う話である<sup>32</sup>。この宝卷は李氏によれば1850年から1934年までの間に、相次いで刊行されており、その発行所は、翼化堂(上海)、慧空経房(杭州)、世家堂(不明)、得見斎書莊(蘇州)、郭元文堂(温州)、聚文堂(天津)、瑪瑙経房(蘇州)、文益書局(上海)、宏大善書局(上海)、惜陰書局(上海)、杭州瑪瑙経房(杭州)などがあり、ほかに抄本も数種類現存している。『香山宝卷』は、また、塚本氏が、「明代にこの宝卷が一般観音信仰の重要な宣伝書となって普及し、特に女子の信仰する所となり、僧もこれら信徒に引きづられて、大衆の観音信仰の依拠する經典的地位にまで上昇しているこの宝卷を、用いざるを得ないまでに、なっていた実情がうかがわれる。」<sup>33</sup>と述べているごとく、明代にはすでに広く普及していたようだ。さらに、澤田氏は『香山宝卷』の普及の要因として「宝卷中の仏教的説話は、元来は仏菩薩の前生を語る本縁譚ではあったけれども、同時に、その菩薩を本尊とする特定寺院の宣伝のための縁起譚でもあったこと、換言すれば、菩薩の前生を語り終えて、その主人公こそ、この寺の本殿に祀られている尊い菩薩で

<sup>29</sup> 『民間宝卷』第17冊 p.民17-494。影印本には年代不明と記す。

<sup>30</sup> 張希舜等主編『宝卷初集』全40冊(1994年、山西人民出版社)。

<sup>31</sup> 李前掲書 p.11参照

<sup>32</sup> 邱氏によると、目はどの医書にも処方が見られず、『宋史』「孝義」に初めて記録され、その後も数はたった4件しかないという。一方、手や指を割股療親する例は少なくない。邱氏は、手脚の指は多くの医書に残る「死人の骨」の発展解釈によるものではないかと考察しているが、次のような例では、病氣救済には手足が効くというような信心があったとみられる。『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十四、明四、「管春浚妻江氏」には、兄の病気がひどくなると、妹は義が手足に関わると謂って、左手中指を断って食べさせたという。「按旌徳県志、江氏、…越数年兄病危、氏謂義関手足、又断左手中指以食之。…」

<sup>33</sup> 塚本善隆、「近世シナ大衆の女身観音信仰」(山口博士還暦記念会編『山口博士還暦記念印度仏教学論叢』、1955年、法蔵館) p.265参照。

あるとて、聴衆香客の敬信を新たにさせ、かねて寄進の錢の一文でも多からんことを期したのである。」と述べ、各地の観音廟がこの宝巻を利用して寺廟の宣伝を行なったことが大きいと見ている。

そうした寺廟の宣伝活動によって普及した宝巻のうち、上記に挙げた中で次いで多いのが松江府華亭県白沙村の回郎廟の由来記になっている5の『回郎宝巻』である。李氏によれば、1886年から民国までの間に、昭慶(地点不明)、三五堂(地点不明)、瑪瑙經房(蘇州)、翼化堂(上海)、聚元堂(杭州)、文益書局(上海)、朱彬記(寧波)、惜陰書局(上海)などの刊本や、ほかに抄本が数種類ある。『回郎宝巻』は、観音信仰とは関係がなく、飢饉で祖母の飢餓を癒すために殺されて肉を取られた三歳の男の子が同じ親の元に生まれ変わって、病気になった母に割股療親して救う話であり、4の『回郎孝心宝巻』も内容は同じである<sup>34</sup>。また、8の『魚藍宝巻』という抄本も題名は一見ちがう話のようだが、内容は『回郎宝巻』と同じである。ただ、『魚藍宝巻』という同名で、観音大士が魚売りの美女に変身して馬二郎を濟度する話も別にある。それはさておき、澤田氏は「孟姜女や回郎のように、苦難と非命に死した後に神仙となったような者は、その本質は冤魂であり厲鬼である。その事跡を湮没させておいては、どんな祟があるかも知れぬ。そこで廟を建てて祀るわけであるが、宣巻でも、その出自と生涯と、そして祀られた縁由とを説き明かすことによって、その厲鬼としての祟の口実を取除く、すなわち冤魂を安堵させるのである。」といい、こうした宝巻は時代が下るにつれて寺廟側の商魂から縁日などで信者や賽銭集めのためによく宣巻され、そうした日には信者や参詣客も多いので、聴衆に与える感銘も効果も大きかったという<sup>35</sup>。

いっぽう『延寿宝巻』も1888年から民国にわたり刊本や抄本で刊行されているが、これらは鄭振鐸氏が『仏曲叙録』で述べているように、人の誕生会で宣巻するために用意されたものだという。子無しの長者夫婦が善行を積んでいると感心した天界から子供を授かるが、その子の寿命は九歳までと限られる。その子がちょうど九歳になった時に、重病の親を救うために割股療親すると、その孝心に感心した天界から10年の延寿を賜る<sup>36</sup>。その後も10年ごとに相手の借金を帳消しにしてやったり、妾の家族を救ったり、召使の不始末を許してやったり、家に押し入った強盗を見逃してやったりして、節目ごとに善行を積んで延寿を賜り、最後には百歳までの長寿をまっ

<sup>34</sup> 岡田真美子が行なった仏教文献中のパラレル研究の一つに、「子の肉の喩」があり、これは各文献の設定で異なる所はあるが、大筋では王と王妃と王子の三人が悪い大臣に国を迫られて逃げる時に、食料が尽きて、王が王妃を殺して食べようとするのを、王子が制止し、自分の肉をそいで両親に食べさせて飢餓を救うというものであり、岡田氏は、仏教文献には子を犠牲にして親が生き延びる例はあってもその逆は見つからない(「<子の肉の喩>と sujāta 太子説話—仏教の生命倫理—」p.347、『江島惠教博士追悼論集 空と実在』、2001年、江島惠教博士追悼論集刊行会編)と報告しているが、これはちょうど割股療親が、子から親へはあってその逆がないことと同じ対応関係にあるといえよう。

<sup>35</sup> 澤田前掲書 pp.275-p.276

<sup>36</sup> 『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第35卷、閩孝部、列伝四之十三、明三、「歐陽律妾劉氏」には、夢に神が現われて、姑に割股療親した嫁の孝心に打たれて、姑の寿命を6年延長したと告げられた人の話を記載する。「按安福県志、劉氏、…姑病篤割股以救、三年病復発割股如前、又三年一夕夢神語曰「汝姑命當久盡、因汝孝乃延六載、今當以某月日逝、汝無患、夫將歸矣。」至期姑果病、律于是日歸、姑目遂瞑。」訳：姑に割股療親して三年後に病気が再発したので、また割股して三年たったある夜、嫁の夢に神が現われて「姑の寿命はとうに尽きていたが、汝の孝心に因み六年延長した。今回は逝くことになるが、汝は思い煩うことなきように。夫は帰ってきますよ。」というので、本当に夫は帰ってきて、姑は病気になって逝った。



うする話である。ほかの2の『女延寿宝巻』や、12の『八宝延寿宝巻』も登場人物や出来事は異なるが、やはり節目ごとの善行による延寿という筋書きは同じであり、また最初の延寿のきっかけが子供時代におこなう割股療親という点も共通する。ところで、地方志を見ると、子供の時に割股療親して旌表されている人は少なくない。明代の府志には、九歳の女の子が父に割股療親し、母に湯薬を炊いてもらって父を治したとあるし<sup>37</sup>、もっと小さい七歳の子も姉と一緒に割股療親している<sup>38</sup>。子供たちは幼いときからこの風習をよく知っていたようで、親や長輩から話を聞いたり、絵本を見たりしたのであろうか。

3の『郭三娘割股賢孝宝巻』は、鄭氏、澤田氏、李氏のいずれも紹介していない。筆者の見た印刷物は不鮮明なところもあり、抄本で押印があるが、その印の文字は読めず、発行年や発行機関は書いていない。今後さらに鮮明なもの求めるつもりだが、物語の舞台は、清朝乾隆年間の江蘇省淮安府清河縣である。長者夫婦の三男の婚礼が終わってまもなく、長者が病気になって亡くなると、長者の妻も病にたおれた。心配した息子や嫁たちが一心に神に祈ると、孝心に感動した神が、医者に変身して家を通りかかり<sup>39</sup>、人肉四両を準備すれば薬を作って救命できると伝える。長男は街の肉屋で人肉を求めるがかなわず、兄弟と嫁たちは思い悩んだ挙句、三男の嫁が割股療親をかってでる。姑への割股療親は成功し、治りにくかった三男の嫁の割股の傷口に、姑が願いを込めて香炉の灰を置くと傷はすっかり癒える。こうして割股療親のことが県官に伝わると孝女として旌表され、賦役の免除と良田を恩賞され、子孫も繁栄する。

6の『葵花宝巻』のストーリーは以下のごとくである。夫が科挙のために遠方に赴き、残された妻は貧困の中で姑に仕えていた<sup>40</sup>。姑はもともと齋戒していたが息子の不在などの心労が重なっ

<sup>37</sup> 『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第33巻、閩孝部、列伝二之四、明一に、「西嘉瑞妻翁氏。按松江府志，翁氏，名靜簡，指揮使國衡姪女。年九歲，父患危證，女扃戶，向大士拜禱，剗左股一瓣，授母黃氏煮羹奉父，父病尋愈。」を記載する。

<sup>38</sup> 『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第35巻、閩孝部、列伝四之十七、明三、「胡氏女」では、母の産後の病がひどく、13歳の姉と7歳の弟が割股療親して旌表されている。「按歙縣志，胡氏女，東閩人。母因産病篤，女年十三，偕弟之憲，簪袴割股和粥以進母病遂愈。時憲年七歲，事聞旌其門。」

<sup>39</sup> 医者や方士が通りかかって割股療親を勧めることはままあったようである。『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第33巻、閩孝部、列伝二之七、明一、「周祥妻張氏」には、一方士が通りかかり、「人肝で治療できる。」といわれたので、嫁は割肝して姑をなおした話を記載する。「姑病不起計無所出，偶一方士過其門，問之曰「人肝可療。」張割左脇下得膜如絮，以手探沒腕取肝二寸許無少痛，作羹以進姑病遂瘳。」また『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第35巻、閩孝部、列伝四之九、明三、「吳應貞妻党氏」には、父が目の痛みに堪えかねて、呼んで来た医者が戯れに「目を治したければ人肉を食べないと。」といったところ、娘は割股療親して父を治した話を記載する。「按陝西通志，党氏，…父禮病目痛不能忍欲自盡，氏多方防救哀毀幾絕，延醫調治或戲曰「欲目明須食人肉。」氏潛入室割一瓣作羹以進父食之其目果愈。」さらに『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之四、明二、「劉芳遠妻王氏」には、姑が病気で嫁が身代わりになろうと祈っていると、三日して一人の道士が薬草を授け酒と煮て蒸気を吸うように命じると、七日して自ずと癒えた話を記載する。「按高淳縣志，王氏，諸生劉芳遠妻。姑病羸垂危，氏焚香籲天求以身代，越三日一羽士授以草藥令煮酒吸氣，七日自愈。」

<sup>40</sup> 先にも紹介した敦煌変文に残る王武子妻と同じく夫の留守中に舅姑に割股療親するひとは多い。『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之一、明二には、夫が試験に行き、姑が病気になって、嫁が割股療親する話を記載する。「文節妻鄧氏。按四川總志，鄧氏，茂州文學文節妻。節赴秋試，母李患病，医治莫效，鄧割左臂肉作羹奉姑，姑食之。…」また『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34巻、閩孝部、列伝三之三、明二には、長患いの姑がいたが、夫が遠出して帰ってこないときに、家が貧しくて、食料も薬もなく、病気がひどくなったので、嫁が割股療親して治した話を記載する。「吳傑妻鄭氏。按貴溪縣志，鄭氏，吳傑妻也。姑應氏久病，夫遠出未歸，家貧飢無以糧，疾甚無以為藥，乃引刀割股和羹以進姑食之頓愈。」

て病気になり、肉を食べたいと望むようになる<sup>41</sup>。嫁は家計が貧しく肉を買うことができないので、ついに姑に割股療親するが、それを知らない姑は肉が少ないといって嫁を虐待する。のちに姑は真相を知って後悔したが、病気が重くなって亡くなる。妻は夫を尋ねるため旅立つ。じつは夫はその頃、有力者に見込まれ、その娘を第二夫人とする望まぬ結婚をさせられていた。旅立った妻は、途中で山賊に襲われるが親切な人に助けられ、やっと夫の第二夫人と会うことができた。だが、有力者のさしがねでその家の召使に毒殺され、庭の古井戸に投げ込まれて、葵花を植えられてしまった。怒った天帝によって全ての悪事が暴かれ、召使や有力者は死に、生前に嫁を虐待していた姑は地獄に落ちていたが、悔い改め、最後はみんなで仏道を修めて昇天する。澤田氏も述べるように、妻が、受験のために家を離れた夫を尋ねるところまでは、ストーリーが『琵琶記』に似ている。この話は明代に戯曲として普及していたという<sup>42</sup>。

7の『玉英宝巻』のストーリーは以下のごとくである。信心深い主人公の玉英が、母や兄の結婚の勧めを拒絶し、信仰の道を深めていると、玉英の信仰心を試すために神が書生に化けて庭に現れる。2人で問答をしていると、男と密会していると兄に疑われ、怒った母と兄によって玉英は絞殺されてしまう。玉英は冥府に行って地獄を歴遊した後、還魂して黎山に行き神のもとで方術を修行する。玉英の母は、玉英を殺したあとで重病になるが、これも信心深い兄嫁が割股療親をして救う。しかし、兄嫁の信仰を嫌う姑は彼女を家から追いだし、その後、自宅が火災で焼けて玉英の兄も焼死したため、姑は大やけどを負って乞食になる。一方、玉英に結婚を断わられた書生は状元に及第したが、僻地の敵軍討伐に派遣されてしまう。だが、方術を学んだ玉英に助けられて無事に帰還し、二人は結婚して故郷で母や兄嫁に再会し、悔い改めた母とともにみんなで昇天する。

10の『孝心宝巻』は、父を早くに亡くした三人息子のうち、次男の孝子が母の病気に際して2度の割股療親をする<sup>43</sup>。一度目は孝子が18歳のときで一滴の血も出ずに母の病気も全快する。二度目は孝子が26歳のとき、肝臓を割き終わったのを弟に見つかるが、湯薬を炊いて母に持つと、すでに一口も飲むことができないほど弱っており、母は亡くなる。母の喪が明けると、孝子は修行に出るが、やがて天寿を全うして冥府に行った。するとそこに近所の顔見知りの男があや

<sup>41</sup> 病気になった親が肉を望む記録は多い。次の三人はいずれも『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第33卷、閩孝部、列伝二之十八、明一に収録のものである。①母が肉を食べたがが得られず、遂に割股して捧げると治癒した。「李景年妻龐氏。按広平県志、龐氏、呉村、李景年妻。母疾、思肉食、不得、遂割股奉之、母疾尋愈。」②姑が病気が重くなって、鳩肉を食べたがが、冬の真っ只中で得られず、左股肉を割いて、煮てすすめた。「張九江妻黃氏。按内黄県志、黃氏、張九江妻。姑尹氏、病篤思食鴿肉時、隆冬遍尋不得、氏乃割左股肉、烹進之。…」③家が貧しく、姑が病気になって肉を食べたがが、どこを探し回っても得られず、ついに割股した一嚮を麦粉の中に入れて食べさせると姑の病気は治った。「程瑞妻聶氏。按魏県志、聶氏、程瑞妻、家甚貧、為人傭作一日、姑病思食肉、氏遍求不得、遂割股肉一嚮裹麩食之、姑疾旋愈。」

<sup>42</sup> 明代万曆刊本『徽池雅調』に「日紅托夢」がある。

<sup>43</sup> 一人が一生のうちに何度も割股療親をする場合も多い。『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十、明二には、夫と住居を移動するあいだ幾度も重病になり、妻は割股療親して治したが、父の病と姑の病に際しても前の如く割股した話を記載する。「胡璜妻金氏。按淮安府志、金氏、山陽人、胡璜妻。素嫻婦道、璜同氏移居揚之通州屢遭危疾、氏割臂和藥愈之及父病姑病又割如前。…」また『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十六、明二には、一生のうちに父、母、姑と三人に割股して三割孺人と言われた話を記載する。「徐時肩妻楊氏。按武進県志、楊氏、徐時肩妻、年十三、母病瘵医禱不愈晝夜哭泣割左臂肉進之…父病奉湯藥必嘗疾甚焚香籲天號慟願以身代復割右臂肉以進…姑病復如前割體肉和藥進…年六十八卒。人稱為三割孺人。」

まって冥府に来てしまっていたので、閻魔に口添えして還魂できるように頼んでやった。閻魔は孝心厚い孝子に感心して、亡くなった母が修行中の身で、それが修了すれば会えることを教え、さっきの顔見知りの男には還魂させる前に、冥府の裁きを見学させることにした。10人の罪人が裁かれたが、8番目の罪人は魚や蛙を沢山殺して毒蛇地獄へ行くべきところを、母親に割股療親したことが酌量され、貧民に転生できることになった。その後、顔見知りの男はさらに地獄を歴遊して還魂し、孝子は母と再会して昇天する。

11の『十二円覚』は、南海観音菩薩が十二人の善男善女に近づき、彼らを次々と勧化して菩薩へと化度するが、そのうちの一人は夫の不在中に病気になった舅姑に割股療親して救う嫁である<sup>44</sup>。『葵花宝卷』と同じく義婦をテーマにしており、これと先にも紹介した敦煌変文のなかの孝子伝にのこる「王武子妻割股救姑」は、夫が遠方へ行って留守中に貧窮した嫁が姑を割股療親して救うという話の流れが同じであり、長く受け継がれたテーマである<sup>45</sup>。

13の『福縁宝卷』は三十回で構成され、物語ではなく七言の韻文を連ねて勧善を説いたものである。その第四回に「勸孝双親」があり、「常想父母養你時，割肉孝親也該應」（親の養育の恩を常に想えば割股療親は当たり前）という一句がある。親の養育に対する報恩として割股療親も孝行の一つに含まれると説くのである<sup>46</sup>。

14の『輪廻宝伝』は、筆者は未見なので澤田氏の梗概にしたがうと、一仙女が長者夫婦に投胎して成長して放蕩者の夫と結婚する。妻の信心に感化されて夫も改心して念仏精進するが、やがて妻が死に、悲しんだ夫も病死する。生前の行いの善し悪しによって妻は昇天し、夫は地獄へ落ちる。だが、妻は仏如来に頼んで夫を地獄から救い出すと、夫は貧民の子として投胎し、九歳のときに両親の病気を割股して治す。その後成長して山に柴刈りに行き、道に迷うが、その時にもとの祖父である仙人やもとの妻である美女に勧化されて修行し、両親の死後仙界に昇天する。

15の『学童日記』は、『宝卷初集』（第39冊）に収録されている絵日記風の刻本である。上段に文字、下段に版画の絵があり、97枚の絵とともに江浙両省を中心に湖南や福建、四川などに住む老若男女の各時代の因果応報話が子供たちにも分かりやすいように述べられ、各話に前後のつながりはない。その1番目は、国朝、常州武進の人で楊乙という乞食がたいそう親孝行であり<sup>47</sup>、父

<sup>44</sup> この物語のように、舅姑の両方に割股療親する嫁もいた。『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之六、明二には、嫁が先の舅姑に愛されており、夫が長く留守にして、舅姑がともに病気になって、割股療親すると、2人は食べられるようになって、嫁は安堵したという話を記載している。「金瑞鳳妻俞氏。按婺源志，俞氏，名良玉，沱川余瑞鳳妻。性端肅，慈惠婦余為翁姑所愛，夫久客，翁姑并遭時疾，氏割股以進饘天求代，翁姑能食，氏始安。」

<sup>45</sup> 下見氏によれば、嫁は夫の親孝行や祖先祭祀を母性で導き支えるだけでなく、姑への孝の実践を通じて「家というもの母性に合体しこれを擁護・維持するという総合的行為を完成し、家父長における家や血族の保護・維持・繁栄という孝実践のための実質的基盤を確立する役割を果たしたのであった。」という（前掲書 p.86）。すると、姑孝行を遂行できない嫁というのは、夫を不孝者にすることであり、夫の不在中に割股療親をする孝婦が多数記録されていることから、そのプレッシャーは相当大きなものであったことが想像される。

<sup>46</sup> 道端良秀は親への報恩という概念が、もともと儒教思想の中にはなく、中国で仏教が受容されるために仏教徒が編み出した教説であるとするが（『唐代仏教史の研究』、1957年、法蔵館）、これを受けて下見氏は、逆に親への報恩という概念を受け入れる素地が儒教思想にあったからこそ、仏教徒の意図がうまくいったことを考えても、中国にもともと親への報恩概念があったと結論づけている。（下見前掲書 p.143）

<sup>47</sup> 小児が乞食して親を養うという話は、『賢愚経』巻第一「須闍提品第七」（慧覺編訳、『大正蔵』巻四）釈迦の前世譚である太子が自分の肉を両親に捧げて救う物語にも見られるという。（梁氏前掲書 p.11）

母の病に際して3回割股療親をおこなう話である。楊乙は、どんなにお腹がすいていても、食べ物を得るとまず父母にすすめ、酒菓を買っては舞を踊り歌を唄って父母を楽しませた。のちに父母が亡くなると、墓を離れずに日夜泣きつづけ、物を得ると必ず墓に供えていた。あるとき穴から金を得たが、天を仰いで感謝しつつも親がいなくて自分だけで享受できないと、貧しく卑しい者に配ってしまい、やがて亡くなると、隣人で冥土に行って戻った人が、その目で楊乙が冥王に迎えられ、天に昇っていくのを見たという。もうひとつは10番目の姑のために割肝療親する嫁の話である。明代、山陽に毛継宗という人があり、母が病気になったが、租税の運搬のために京に行ってしまったため、嫁の馮氏は自分の寿命を減らして姑の代わりに死ぬと天に願掛けをし、脇腹を切って肝が出たところで、子供の呼び声がして姑が目を覚ましたため、ハンカチで刀を隠し、子供をあやして再度割肝すると、湯薬に煎じて姑にもっていった。姑に何の肉かと聞かれた馮氏は鹿肉と答え、食べた姑の病も癒えたが、割肝した傷口の血の跡を隠すことが難しく、小姑に知られて、姑にもばれた。諸生の江天乙は馮氏の孝心をたたえて「奇孝驚天集」を作り、馮氏は政府から扁額を送られて旌表されたという。この2話以外でも、割股療親はしないが、母の目を舐めて治す息子や、継母にいじめられても我慢する息子など二十四孝の影響を感じさせる箇所が多数見られる。先の楊乙にしても、舞や歌で両親を喜ばせるところなどは老萊子を思い起こさせる。『二十四孝』中の孝子では唯一、母の鞭打つ力が弱ったのを悲しんだ韓伯瑜がのっている。

### 三 割股する孝子や孝女を支持する神々

これらの宝巻には、多くの神々が登場し、孝子や孝女たちに対して、割股療親を示唆し、手助けし、かれらをかならず保護する。神々は、当時の民衆の生活空間のどこにでもいて、いつも孝子を見ているから、その登場の仕方もさまざまである。たとえば人間に変身して割股療親を勧めにやってくる、その方法を孝子に教えてあげたりする。厨房で刃物を突き立てていると、竈から一部始終を見ていて天に報告したりする。雲の上から見ている場合もある。割股がもとで過って死んでしまうと還魂させる。あるいは割股したあとの傷を治したり、治療の方法を示唆したりする。そしてどの神々も、割股する孝子を全面的に支持し称賛する。そこで次節では、割股療親説話に現れる神々についてその役割を考察したい。

○天帝—冥界にあって鬼神の最上位にあるのは天帝である。天帝は古来、多くの説話の中で「上帝」「玉皇」「天帝」などの名で出現する<sup>48</sup>。下位にある神々の報告を聞いて、いつも因果応報で対応する。割股孝子・孝女に対しては、かならず全面的に支持し称賛をする。『葵花宝巻』では、閻羅王の裁判報告を聞いて、割股の孝女孟日紅を毒殺した梅香には、天誅として雷公雷母をつかわして感電死させるとともに、孟日紅の棺を開けて還魂させることを命じ、かつて姑に割股療親した孝心に感じて、還魂する前に地獄にいる姑に会わせる。『孝心宝巻』では、割

<sup>48</sup> 阿部泰記『包公伝説の形成と展開』（2004年、汲古書院）p.87参照。

肝をするも母を失った孝子が廬墓していた時、失った肝の痛みが激しくなり、命の危険を生じたため、玉皇はいそぎ霹靂大將軍、六甲六丁、大医、太白金星君の一同を錢聚萬のもとに差し向け、傷の治療をさせる。その後、孝子の割股療親に感動した玉皇は、その村一帯にだけめぐみの雨を降らせる。

- 太白金星一星の神様。変身して人間界に姿を現す<sup>49</sup>。『郭三娘割股賢孝卷』では、医者に変身して家を通りかかり、人肉四両を準備しないと命が助からないと告げ、郭三娘が割股をすると、称賛して、湯薬の作り方を指導する。湖北・東路花鼓戯『張孝打鳳』では、母に割股療親するも病が再発し、鳳を捕獲して母に食べさせた孝子・張孝が、禁令を犯した罪でつかまって、処刑されそうになると、玉帝の命を受けた太白金星は、張孝に変身して、死刑執行人の目をくらませ、窮した裁判官の包公は、案山子を作らせて張孝の服を着せ、執行人にその案山子を斬らせて刑の執行を行なったことにする。
- 雷神(雷公・雷母)―『葵花宝卷』では、割股孝女・孟日紅を恨んで毒殺した召使い梅香が、霹靂によって撃ち殺される。また、雷神は悪人の命を奪うだけではなく、殺されて裏庭の井戸に埋められ葵花が繁った孟日紅の棺に霹靂を落として、中から孟日紅を還魂させる。
- 北斗―北斗七星を神格化した神で、北斗真君、北斗星君ともよばれ、人間の寿命・富貴・貧賤などをつかさどる司命の神とされる<sup>50</sup>。『孝心宝卷』錢聚萬は母に割肝する前に北斗に祷告する。『延寿宝卷』では、9歳で割心療親して冥府に行ってしまった金本中に感動した玉帝が南北二斗星君<sup>51</sup>に命じて金本中に10年延寿することを命じた。『女延寿宝卷』でも、南北二斗星君が二度目の父への割股で一度は冥府へいくも還魂した素玉ら親子に、それぞれ12年の増寿をおこなった。
- 閻羅―冥界の裁判を行う。割股療親説話では、陽寿が尽きないうちに誤って冥界に行った孝子や孝女の魂に判定を加えて、陽界に還魂させる。また孝子や孝女に辛くあたった者には、因果応報の裁きを加えて地獄送りの判決を下す。閻魔大王は、いつも割股した孝子や孝女の味方であり、裁きでは必ず割股した孝子への同情と称賛を口にする。『葵花宝卷』では、毒殺された主人公孟日紅の魂を冥府で裁くなかで、かつて姑に割股をしたことが判明し、閻羅王は金童玉女に命じて、日紅の魂をいまは地獄で責め苦を受けている姑・楊氏の魂と再会させる。
- 九天玄女―西王母に仕える人首鳥身の女神で、黄帝に兵法を授けて蚩尤を平定させたという<sup>52</sup>。『葵花宝卷』の主人公孟日紅は、九天玄女の侍女慈善仙女の生まれ変わりであったのだが、姑に割股をして夫を探しに行った先で毒殺されると、九天玄女が孟日紅の魂を悪鬼たちから守る。
- 観音菩薩―中国の民衆に長期にわたり広く信仰され、病気やその他自然人為のあらゆる厄難危

<sup>49</sup> 『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典第、35卷、閩孝部、列伝四之九、明三、「吳淑乾女」には、神らしき見ず知らずの老人がふらりとやってきて割股の傷を治してくれたという報告を記載する。「按蘭州志、吳氏、吳淑乾女。性誠孝年十四、父疾、割股創甚幾死。有一老人饋藥敷之患愈。竟不知老人為誰。」

<sup>50</sup> 窪徳忠『道教の神々』(2000年、講談社) pp.159-161参照。

<sup>51</sup> 死をつかさどる北斗星君に対して、南斗星君は生をつかさどる神。窪前掲書 p.163参照。

<sup>52</sup> 阿部前掲書 P.87参照。

険を除き、またよい子孫・富貴・長寿をめぐむ「有願必応」の慈悲深い守護神<sup>53</sup>。観音は、割股する孝子のうちでも特に孝女に対して、いつも励まし協力する。『十二円覚』では、南海観音菩薩が十二人の善男善女に近づき、彼らを次々と勸化して菩薩へと化度するが、そのうちの一人で舅姑に割股療親した周氏に対しては、その孝心に感動して割股する時に彼女を保護して見届けるとともに、五鬼の祟りをといて舅姑を治す。その後は乞食婆<sup>54</sup>に化けて周氏に出家修行を勧め、発心した周氏が夫とともに出家修行に出ると、残された舅姑は自殺をしようとするが、観音菩薩が嫁の割股に感動して勸化したことを知らせる詩を届けて思い止まらせ、最後には周氏の信仰心を試すために、若く美しい青年和尚に化けて周氏に情交を迫るが、周氏が命をかけて断ると、とたんに全てを明かして周氏に第七人目の化度を約束する。

- 東厨司命—『葵花宝卷』では、割股した孟日紅が薬湯を姑に勧めると、肉を独り占めしたと疑い孟日紅を虐待する姑に対して怒り、天帝に一部始終を奏する。
- 韋馱—仏教を守護する神。『十二円覚』では、夫が勉学のために遠地にいった後、舅姑が病気になるって割股療親しようとする孝行な嫁の周氏に対して、観音大士が感動し、韋馱天に命じて『救苦経』一卷を周氏に身につけさせてお守りとする。
- 東嶽大帝—泰山神。『女延寿宝卷』では、朴素玉が二度目の割股で気を失うと、その魂は冥府の東嶽殿にたどりつき、理由を知った東嶽大帝は彼女の孝心を絶賛し、すぐさま天帝に奏上して、父母娘三人の福寿を増やしてもらうようとりはからう。
- 神仙—『孝心宝卷』では、銭聚萬が割肝したとき、至誠の心に感動した神明が、銭聚萬に一滴の血も流させない。そしてその夜は、村一帯に白檀のような香気が漂って、夜が明けると村に割股療親があったことがわかる。このように割股療親をすると、自然現象に異変が起こるなどの記録は地方志などにも多く残る<sup>55</sup>。『回郎宝卷』では、遊嬉神が人間界に憧れて、玉帝にかくれて密かに周氏に投胎し、回郎という男の子に生まれ変わって母に割股療親する。
- 家堂六神—『葵花宝卷』では、孟日紅が割股して泣きながら血を流して倒れているところへ駆けつける。
- 祖先神—祖先を神格化したもの。湖北・東路花鼓『張孝打鳳』では、主人公張孝が股肉を病気の母に食べさせるため、祖先堂で股を割いて気絶すると、祖先神が代わりに張孝の股を割き、

<sup>53</sup> 塚本前掲書 p.262参照。

<sup>54</sup> 『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第33卷、閩孝部、列伝二之三、明一には、杜如芝妻陸氏が姑に割股療親したとき、神が青衣の老嫗に化けて手伝ったと伝える。「按和州志，陸氏，翁源縣教諭，杜如芝妻。姑病篤夜靜割股惶懼，莫知所措恍惚間有青衣老嫗佐之。遂且熟以食姑，姑更活三十年相伝以爲神。」

<sup>55</sup> 『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第33卷、閩孝部、列伝二之十六、明一には、割股して羹を作っていた時に大雨が降ったが、おもてに置いていた台だけが濡れなかったのは孝感のなせるわざといわれたという話を記載する。「吳實妻芮氏。按太平府志，芮氏吳實妻，年十六，歸實明年夫病亡無子，父母令嫁芮誓不歸寧奉翁姑。以老姑疾，露白夜禱割股作羹時大雨台上獨無，咸謂孝感所致。」また『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第33卷、閩孝部、列伝二之八、明一には、姑に割股療親した夜に、彩雲がその家屋を取巻いて、神が降臨したかのように見え、三日もたたぬうちに姑は癒えたという話を記載する。「陳瞿福妻郭氏。按東陽縣志，郭氏，…夜焚香禱天願減己壽以益姑，割左臂肉以進，是夜見彩雲環其室，若神臨然，姑疾不三日瘳。時，郭年十九，成化七年八月也。」また『古今図書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十三、明二、「謝厚仁女」には、疫病で重篤になった母に十六の娘が割股療親すると、母は治り、周りの疫病も終息した。割股療親すると、村の疫病がおさまってしまったことがあったという話を記載する。「按海豐縣志，謝厚仁女，年十六。家有疫疾，其母病亟，女痛哭密籬天割股肉調羹啖母，母疾隨愈。衆疫亦息。」

仙丹を飲ませて復活させる<sup>56</sup>。

○竈神—竈を神格化したもの。割股療親説話は、孝子や孝女が台所で刃物を身体に当てるところを見ていて、天に報告する役割が多い。『葵花宝卷』では、孟日紅が割股して作った薬湯を飲んでしまった姑が、もうお代わりがないと知ったとたん、脂身ばかりを自分に食べさせて、嫁の日紅がよい肉をひとりじめしたと疑い虐待する<sup>57</sup>。これを見た竈神は激怒して一部始終を天庭に奏する。『孝心宝卷』では、銭聚萬が母のために割肝して鍋で煮るときに、竈神に祷告する。

#### 四 割股は大孝である

宝卷の割股療親説話を読んでいくと、割股療親は善行なのだという不思議な感覚が生じてくる。これは宝卷の文体形式である韻文と散文の交錯が生みだすリズムの中に、割股を賛美する言葉が繰り返し現れるからだと考える。神々や登場人物たちは宝卷のリズムのなかで、割股療親した孝子や孝女を、一切の批判を抜きに全面的に支持し賛美してゆく。これらの手放しでなされる割股療親に対する肯定的な言葉は、それを聞く民衆に割股する孝子への共感と感動を生じさせた。本節では、上掲の宝卷の中で割股療親を賛美する言葉を考察してみたい。

1. 『十二円覚』では、舅姑に割股療親した嫁の周氏に対して観音菩薩が賛美する。

観音菩薩在雲中嘆道「周氏行孝出自真心実実難得，他公婆病証乃是五鬼作祟，待我遣他遠去病体自癒，不枉周氏一点孝心。」（訳：観音菩薩は雲の中から嘆息して言った。「周氏の行なった孝は真心から出たもので実に得難い。あの舅と姑の病気は五鬼が崇めているのだから、わたしが遠くに遣ってしまえば病体はおのずと癒え、周氏の孝心を無駄にはしまい。）」さらに、周氏の割股療親が成功したのをすっかり見届けると、次のように讃嘆する。

観音大士想道「周氏行孝天下少有，待我化他修行做一名円覚去罷。」（訳：観音大師は考えていった。「周氏の孝行は天下に稀であり、私は彼女を勧化して修行させ円覚の一人としよう。）」

その後、周氏が夫と出家修行にでてしまい、嘆き悲しんだ舅姑が自殺を企てると、次のような詩を居間の床の上に落としてさりげなく嫁の割股療親を知らせる<sup>58</sup>。

<sup>56</sup> 阿部前掲書 p.90参照。

<sup>57</sup> 『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第35卷、閩孝部、列伝四之十六、明三、「呉啓祥妻毛氏」には、右股肉を割いて粥にまぜて姑に食べさせると、姑はこれが美味しいので余りがあるか問い、嫁は今度は左股を割いて病気を治したという再度割股するという話を記載する。「按溧陽県志，呉啓祥妻毛氏，事姑謝最孝，姑疾篤不起，祥力田而貧，毛氏割右股和糜以進謝食之甘問有餘，毛復割左股病尋愈。」

<sup>58</sup> 割股して気を失っている嫁に、神が夢のかたちで現われて助け、また姑の夢にもあらわれて割股療親を伝えた記録がある。「胡仕俊妻劉氏。按金谿県志，劉氏…姑病革，氏焚香默禱以刀割股血湧仆地，夢神人曰「汝能如是姑疾起矣。」少甦，取股肉作湯以進姑食之甘，亦夢神人曰「汝有孝婦神明格之病。」当起旬日果愈。」（『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第33卷、閩孝部、列伝二之十五、明一）。つぎの例も夢に神が現われて助けると告げる。嫁が姑に割股療親すると、姑の夢に神が現われて、嫁が孝なので汝を活かそうと言われ、まもなく治癒する。「按新建県志，朱氏，李應昌妻，…姑善病藥餌無措，割股進之姑。夢神人告曰「汝媳孝我當活汝。」姑尋愈。」（『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第35卷、閩孝部、列伝四之十三、明三、李應昌妻朱氏）。神ではないが、夢に出てきた家族に割股療親があったことを告げられた人もいた。姑の病がひどくなり、名医は手の施しようがないと言ったが、暫くして治ったので不思議に思っ

詩曰、「割肝行孝世間稀 跳出紅塵免是非 喫下肝湯你不暍 特来点化上天梯」(訳：詩に曰く「割肝孝行世間に稀 世俗を飛び出すを非とするは無用 肝の薬湯食べたの気づかず 特に勧化し天梯上る」)

2. 『女延寿宝卷』では、東嶽大帝<sup>59</sup>が素玉の行なった両親への割股を、すぐに天帝に奏上する。東嶽大帝聴罷連称「善哉、善哉。」即時写表奏上天庭。玉皇看罷「世間有○○<sup>60</sup>孝心女子、果真難得。」(訳：東嶽大帝は(素玉が二度目の割股で魂が身体を離れて東嶽殿に来てしまったいきさつを)聞くと、声を連ねて「善き哉、善き哉。」と言い、ただちに天庭に文書で上奏した。玉帝はそれを見て、「世間に○○な孝心の女子はほんとうに得難い。」)
3. 『延寿宝卷』では、閻魔が幼い子供が割股療親をなしたことに感動し、天帝に奏上する。閻王嘆曰「世間少有九歳之童行此大孝，割腹挽心以救親病命歸地府，看此孩童年級雖少真是難得，具表一道速奏上帝便了。」(訳：閻王は讚嘆して言うに「世間には9歳でこのような大孝を行なう子供は少ない。腹を割き心臓を取り出して親を救って地府に帰命してしまうとは、この子は歳はまだ幼いが本当に得難いことだ、さっそく上帝に奏することにしよう。」)
4. 『八宝延寿宝卷』でも、同じく閻魔が子供の割股に感動して奏上し、玉皇が歡喜してその子を還魂させている。

閻王聽說年少孩兒行此大孝，便叫判官將生死簿查明文俊寿限注定五十歳病死，天宝則有十歳陽寿。既然如此，不好隱瞞忙真孝道，表文奏上天庭也。玉皇見奏歡心，連忙敕差召諸尊，十歳孩童行大孝，胸前割肉救父親，南北二斗增延寿，再送天宝轉還魂。(訳：閻魔大王は幼い子供(陸天宝)がこのような大孝行をおこなったと聞き、次いで判官を呼んで生死簿を調べさせると、文俊(天宝の父)の寿命は五十歳で病死、天宝は十歳の陽寿であった。真の孝道を隠しておけないと、天庭に奏上した。玉皇は奏文を見て歡喜し、いそぎ諸尊を差し向けた。十歳の童が大孝をなし、胸上の肉割き父救う、南北二斗星君が増寿して、天宝再び還魂す。)

割股療親を大孝だと稱賛するのは神だけではない。周囲の人々も、割股療親したことを知るとみな一様に感心して孝子や孝女を稱賛するのである<sup>61</sup>。

---

た。夫の夢に父がでてきて「孝婦が姑を活かした。天は米二斛と酒一石をたまわる。」といい、後に何度か夢をみた。ある日、夫が妻の臂の傷跡をみて驚いて問うと、割股して薬に混ぜたことが分かる。「興化県志、吳氏、諸生鄭毓鳳妻。姑疾殆，名醫袁體菴曰「已不救姑與之藥盡此心耳無益也。」既稍愈，醫怪之。毓鳳父夢或告曰「孝婦活姑，天子米二斛酒一石。」後效夢。一日，毓鳳見吳臂上痕踰寸驚問之知其割肉和藥也。」(『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第36卷、閩孝部、列伝五之九、明三、鄭毓鳳妻吳氏)。

<sup>59</sup> 五岳の中心をなす泰山の神様。民衆の間では、玉皇上帝の孫で、人間の賞罰や生命をつかさどり、現世と来世とをともに管理しているから、現世では発覚しなかった悪事でも、来世で調べあげて、玉皇上帝に逐一報告する神として恐れられていたという。窪氏前掲書 P.205。

<sup>60</sup> 文字不明瞭。『民間宝卷』、2005年。p.民17-69。

<sup>61</sup> 本人よりも周囲の人が割股療親を旌表してほしがれる例がある。『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十一、明二には、嫁が姑に割股療親して亡くなったのを憐れんだ舅が自分で書状をしたためて県令に旌表を求めたという。「屠繩武妻章氏。按富陽縣志、章氏…姑高氏病驟作医藥罔效，章祝天祈以身代割股和湯進之姑旋愈。章年三十有四卒。翁憐之自作行狀求縣令張一鶚申請旌表。」まだ未婚で親に割股療親したことが周囲に知られると、求婚されることもあった。『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十二、明二には、父に割股療親して治ると、邑令がこれを旌表し、拳人の朱国望という人がこれを賢として、側室に迎えたという。「朱国望繼妻姜氏。



5. 『葵花宝卷』では、孟日紅の割股療親を知ると周囲はみな称賛する。そのうちの一人に近所に住む亡くなった舅と親交の深かった焦樸がおり、書画を鑑賞し作詩もできる知識人であった。この老人は舅の死後は後見人として夫の進学を勧め、孟日紅と姑に米や衣類などの差し入れをして一家を支えていたが、孟日紅の姑に対する割股療親を知ると感動し、日紅の味方をする。

「大娘果然真個割肉救婆，那世間少有如此賢哉。你婆反要打罵，說你忤逆不孝。大娘，我老漢同你進去與你說個明白。」（訳：「奥さんがもし本当に姑に割股したとすれば、それは世にもまれな殊勝な行いですよ。なのに、あなたの姑さんは打ったり罵ったりして、あなたを不孝者といっています。奥さん、わたしはあなたと入って行って、あなたのことについて説明してあげましょう。」）

また、孟日紅が還魂し、晴れて夫と再会してこれまでの経緯を語ると、高愷は次のように称賛する。

高愷道「妻呀，你割股救親乃是大孝…」（訳：高愷は、「妻よ、あなたが行なった割股療親はほかでもない大孝。…」）

高愷は天子にこれまでの経緯と解任願いを奏上すると、天子は妻・孟日紅の割股療親を称賛して旌表を行なう旨を下す。

你母去世不能終養係寡人留卿之故，卿妻割股救親實為難得世之賢孝，命地方官建造牌坊，万古伝揚以表孝心。（訳：そなたの母が世を去り終生の孝養を尽くせなかったのは、わたしがそなたを引き留めたからで、そなたの妻が割股療親したことは実に世に得難い殊勝な孝行であるから、地方官に命じて牌坊を建造させ、末永く宣揚して孝心を表彰させようぞ。）

6. 『回郎宝卷』では、大飢饉にみまわれた村で、三歳の子供を殺してその肉を老母の飢餓を癒すために供した息子に対して、世間からの絶大な称賛があった<sup>62</sup>。

華亭県官多分明，一道文書詳府門。府看得多歡喜，殺子救娘世無人。松江知府来詳上，上司拜本奏帝君。五更三点皇登殿，兩班文武進朝門，万歳見奏龍心喜，這為松江早荒臨，五谷田禾無收割，松江百姓苦難禁，華亭有個曹文政，家中貧苦好傷心，這為飢荒難度日，文政殺子救娘親，皇帝聞奏龍心喜，連称難得讚連声。…（訳：華亭県知事は理解して、文書で詳細を府に知らせ、知府は見て歡喜し、殺子救母を世に行なう人はなしと、松江知府が来て詳細を上奏すると、その上司が帝に奏上した。五更三時に皇帝が登殿すると、二班の文武官も朝廷の門をくぐり、万歳して奏上すると帝は歡喜し、松江府は早魃に臨んで、五穀水稻の収穫がなく、松江府の百姓は苦難に耐えている。華亭県に曹文政がいて、家は貧

按嘉善県志，姜氏，…父病革，姜虔禱于天割股和藥餌以進父病經瘳。邑令徐儀世旌之。举人朱国望聞其賢，聘為繼室。」

<sup>62</sup> 現実の世界では、いくら親のためであっても子供を殺せば罰せられた。『新校本明史』、列傳、卷二百九十六、列傳第一百八十四、孝義一、沈德四では、明の始め、山東の守臣から、日照(青州)の民に、母が病気で割股療親したが治らず、願掛けをすると病気が治ったので、三歳の子供を殺して祀った人がいたと聞いた帝(明の太祖)は怒って、その民を逮捕し、鞭打ち百回して、海南島へ流し、(官僚たちに)旌表例について議論するように命じたという。「至二十七年九月，山東守臣言「日照民江伯兒，母疾，割肉以療，不愈。禱岱嶽神，母疾瘳，願殺子以祀。已果瘳，竟殺其三歲兒。」帝大怒曰「父子天倫至重。禮父服長子三年。今小民無知，滅倫害理，亟宜治罪。」遂逮伯兒，杖之百，遣戍海南。因命議旌表例。」

しく悲しみは深く、飢饉を乗り越えるのは難しく、文政は殺子救母した。皇帝は奏文を聞いて歓喜し、声を連ねて得難しと称賛した。…)

そして、皇帝は一般人であった曹文政に七品冠帯を賜り、母を一品夫人に、妻を二品夫人に封じて、今後は故郷の松江府で民を治めながら親に孝養を尽くすように言い渡すと、糧食三年分や黄金一千両も贈呈した。そうして、殺子救母した曹文政に対する称賛は、人間界だけにとどまらなかった。

文政做官清如水，錢糧不要半毫分。百姓個個都稱贊，萬民安樂盡歡欣。值日功曹來啓奏，難得松江府官清。玉皇見奏龍心喜，難得官清治萬民。玉帝恩賜年豐熟，連熟十年好收成。風調雨順年歲稔，家家戶戶謝神明。(訳：曹文政は官職を清廉に勤めて、いささかの報酬も求めなかったもので、百姓達はみな称賛し、万民は安楽で喜びに満ちた。值日功曹が、松江府の官吏が清廉だと奏上すると、玉皇は奏文を見て喜び、官吏が万民を清廉に治めるのは得難いことと、玉帝はこの年の豊作を恩賜され、十年のあいだ豊作が続き、風雨は順調で穀物稔り、家々はみな神明に感謝した。)

7. 『孝心宝巻』では、割肝療親をした孝子を一目見ようと老若男女が詰めかけて、みな感動の涙を流し口々に称賛する。その一方で割肝のかいなく没した母に対する天の処遇については恨み言をいう。

且説孝子割肝，声名一人伝兩，兩人伝三，遠近聽得這個奇聞齋來觀看。到了念八日，風和日暖，天氣清明，看着人山人海，個個稱贊無不流淚。割肝孝子外邊聞，人人爭看孝子心，待等三月念八日，正值天氣好晴明，人山人海多熱鬧，傍邊議論亂紛紛，有人特地前來到，有人因事也來臨。也有學士詩文輩，也有經商賣買人。也有父親携兒子，也有祖老挽童孫，有說此是真孝子，有說天道不公平，有說生死天排定，有說閻王不容情。既然割肝如此孝，皇天不該閉眼睛，神明也好天宮奏，救其母命理該應，救了其母還陽轉，留伝後代勤世人。(訳：孝子が割肝したと、人づてにつぎつぎに伝わり、遠近の者がこの奇聞を聞きつけて見に来てきた。二十八日になり風も和み暖かで、天気は晴れて明るく、見物の人だかりがして、それぞれ称賛して涙を流さない者はなかった。割肝した孝子のうわさが広まると、人々は争って孝心の人を見ようとした。三月二十八日を待って、まさに天気は絶好調、押し寄せた人々は賑やかに、そこかしこ議論紛々、ある者はわざわざやって来て、またある者は用事にかこつけてやって来た。学士や詩文をものする輩もいれば、商売人もいた。また父親が子供を連れて来れば、年寄りが孫の手を引いて来た。ある者がこの人は正真正銘の孝子だと言えば、ある者はお天道さまは不公平だといい、ある者が生死に順番などあるものかと言えば、ある者は閻魔さまは情け容赦がないと言った。割肝してこのような孝行を行なったのだから、天帝も目をつぶっているべきでなく、神明も天宮に上奏して、あの母親を救ってこの世に転生させるのが理の当然で、後代に残し伝えて世間の人々に勧めよ

う。)

こうした、割肝療親を称賛する神々や人々の言葉は、リズム感をもった散文と韻文の繰り返しの中で、それを聞く民衆に、割肝療親は大孝であるとして肯定的に受容されたことだろう。一方、割肝療親をした孝子自身は、自分の行為をどのように評価するのだろうか。

8. 『孝心宝卷』では、母に割肝療親した主人公銭聚萬は、割股が聖賢の教えに背く行為だとよく理解してのことだった。だから、周囲が旌表を望んでも固辞して修行にでてしまう。

孝子謝道「孝順父母是做人子該当之事，我豈敢拿這點没有功勞的孝順空壳虛名，只等三年服滿出家修行，斷不敢相煩諸位先生，多多有謝。」(訳：孝子は謝して述べ「父母に孝順であるのは人として当たり前です。私がどうしてこれしきのなんの功勞もない孝順でもって空虚な売名をする勇氣がありましょう。三年だけ喪に服すのを待って出家修行しますから、諸先生方のお骨折りはどうかありがたくお断りさせていただきます。)<sup>63</sup>

那孝子，開言說，一一哀告　その孝子、口を開いて言うに、一々嘆願す  
說不孝，罪孽重，遺禍娘親　(自分を)不孝といい、(自分の)罪禍は重く、母に禍を残した  
我如今，這等事，安能妄動　わたしはいま、これしきの事で、どうして妄動できようか  
古聖賢，称孝子，全在保身　古き聖賢で、孝子と称すは、みな身を保っていた  
我如今，傷身体，徒然受苦　わたしはいま、身体を傷つけ、ただ苦しみを受ける  
恩如海，未能報，報答幾分　(母の)恩は海の如し、未だに出来ず、幾らかの報いさえも  
斷不可，報官府，牌坊建造　断じてならない、官府への報告、牌坊の建造  
怎敢当，沒真孝，空壳虛名　どうしてできよう、真の孝でない、空虚な売名  
不孝子，自作孽，親娘受禍　不孝者、みずから禍いを作り、母が受禍す

これらの言葉から、割肝した孝子は、それを真の孝ではないと考えていることが分かる<sup>64</sup>。

そして、彼は言葉にはしていないが、何も方法がなくなった時は<sup>65</sup>、親を救いたいという至

<sup>63</sup> 割股療親するも母を失い、それでも旌表を騒ぐ周囲に反し、割股した本人は固辞して出家して尼になった女性もいた。「按建昌衛志，王氏女，越雋衛人，未嫁父早没，母病割股以療後母死。人欽其孝争聘之，王遂削髮為尼。至今有姑姑寺乃王氏出家所也。」(『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第33卷、閩孝部、列伝二之十、明一)。以下の話も周囲が旌表を望んだのを本人が止めさせた例で、舅に割股療親した嫁がいたが、舅は当初それを知らず、あとで郷里から伝わって旌表してもらおうとしたが、嫁が固辞したという。「陶婦鄧氏。按進賢県志，鄧氏，陶會三媳。會三病篤，鄧割股和湯以進會三食之而愈。翁竟弗知，躡月郷里徧傳欲旌，鄧固辞乃止。」(『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典第33卷、閩孝部、列伝三之十五、明二)。

<sup>64</sup> 民衆は男性も女性もただ無知なために割股しているのではなく、孝道思想を踏まえたうえで割股療親しており、例えば夫が自宮したのを父母の遺体を傷つけた人間にあるまじき行為と批判できるほど孝を理解している妻が、自分は姑に割股療親している。『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第35卷、閩孝部、列伝四之七、明三には、夫が脱税して鞭を受け刀を取って自宮して昏倒した。妻は憫嘆すると、夫は息をふきかえして「泣くな、私が死んだらおまえは他所に嫁ぎなおい、私が死なずともおまえはまた嫁いでゆくのだ。」という、妻は「あなたは父母の遺体を傷つけ、すでに人でなしなのに、さらに妻に不義をすすめるとは。」という、夫は京へ赴き、妻は家に残り姑に仕えた。姑が疫病になって肉を欲しがったので割股療親したという。「于奎妻丁氏。按范県志，丁氏，于奎妻。奎因逋稅受笞取刀自宮昏仆于地。氏大慟，奎少甦語丁曰「勿哭，我死汝更嫁，我不死汝亦嫁。」氏曰「汝毀父母遺體，已非人類，又教妻為不義乎。」奎赴京，氏事姑家居。姑染疫思食肉，乃自割股一擲作羹以進姑啖之。…」割股する孝子・孝女にとっては、割股療親と身体毀傷の禁はまったく矛盾しない。梁氏の調査した『素行録』という一人の孝子の生涯に渡る孝行の記録においても「割股」と「全婦(身体毀傷の戒め)」が全く矛盾することなく混在し、これについて「後識」などでもその矛盾について一切言及していないと述べている。(梁氏前掲書)

<sup>65</sup> 貧しかったために割股しか方法がなかったといい、自分の子供に真似をしないように言い残している人もいる。『古今圖書集成』明倫彙編、閩媛典、第34卷、閩孝部、列伝三之十九、明二、「莫志喜妻方氏」には、家が貧しく舅姑に割

誠心を神に伝えるために、割肝を行い、神が感動すれば親は治るが、そうでなければ救えないと考えているようだ<sup>66</sup>。銭聚萬は自分が不孝だから、つまり割肝したけれども気持ちが神にとどかなかったから、母を失ってしまったと言っている。だから、銭聚萬の二度目の割肝療親は成功することはなかったが、民衆は孝子の言葉や態度を通じて、割股療親は神に自分の孝心を示す最終手段であり、割肝に神が感動しさえすれば、救ってもらえるのだと理解しただろう。

## 五 割股孝子孝婦の因縁

宝巻に登場する股を割く孝子や孝女は、人間の姿をしているが、じつはもともと天上界の仙人や金童玉女であったのが、わけあって人間界に投胎したという筋書きが少なくない。これについて、澤田氏は、宝巻を文学的に構成するものは、本縁説と臨凡説であるといっている。本縁説とは仏菩薩が現在の地位を獲得する以前の、まだ人間や動物であったときの苦行の物語であり、後者の臨凡説とは股を割く孝子たちのような一般人に、仙人や金童玉女が投胎して、人間界で多くの苦難を乗り越えながら、最後には昇天する物語をいう<sup>67</sup>。

たとえば、『回郎宝巻』では、主人公の回郎は、もともと天上に住む遊嬉神であったが、雲上から人間界を眺めているうちに、科挙に合格して官僚になって栄光を享受したいと思うようになり、玉帝にだまって勝手に周氏の体内に投胎する。

我那半天遊嬉神是也。座在雲頭上面。逍遙快樂。思想凡間登個金榜。你看為官之人。好不榮耀。十分威光還有那少年夫婦。十分恩愛我不如瞞過玉皇。逃下凡間為人榮耀幾春。有何不可。逐即瞞走便了。(訳：私はあの半天遊嬉神である。雲に座って、逍遙として心地よくしていると、下界で金榜に名前が載ることを考えた。官僚になるというのは、まったく栄華のきわみだ。あそこにいる若夫婦はとても愛情深いから、私は玉皇を欺いて、こっそり下界に行って人間として何年か栄華を享受してもよいではないか。さて、だまって行ってしまおう。)

後にこの事は、回郎が母に割股療親を行なったため、竈神の奏上によって玉皇にばれてしまうことになる。

此時回郎有七歳 就要割股救娘親 このとき回郎は七歳 割股して母を救った

股療親したが、死ぬまで人に言わず、貧しさのために名声のためではなかったのだから真似ないようにと子供たちを戒めたという。「按莆田県志，方氏，莫志喜妻。家貧事舅姑孝，舅赴省闈婦得篤疾，氏割股和粥進舅立愈。姑郭氏病劇割股弗效，乃割肝以療隨瘳。終身不令人知，戒其子婦曰「吾為貧耳，非為名也，願汝曹勿效之。」

<sup>66</sup> 割股ではないが、臂の血を採って姑に調薬するも効かなかった時の嫁の言葉として、『古今圖書集成』明倫彙編、閨媛典、第35卷、閨孝部、列伝四之十五、明三、「李芹妻王氏」に、血を採って調薬したのに姑が亡くなってしまい、妹に盥の中にある包帯のことを問われて、「私は血を採って姑を救おうとしたけれど、治せなかったのは、自分の孝心が不足して神が感動しなかったからで何をさらに言うことがありましよう。」という。「按上元県志，王氏，…姑夏氏疾，王晝夜侍左右不解衣者，数旬祝天割臂血調薬姑卒弗救。其姊見其每盥頰臂有護帛問之，泣曰「吾取血以救姑，而竟弗瘳，是吾孝不足感神復何言。」…」

<sup>67</sup> 澤田前掲書 pp.64-66。

周氏喫了股湯藥 病体痊愈保安寧 周氏は股湯藥を飲んで 身体はすっかりよくなった  
孝順還你孝順子 皆因周氏孝婆身 孝順な人の子孫も孝順で これも周氏が姑に孝順であ  
ればこそ

一家大小都行孝 竈司菩薩奏天帝 一家の大小みな孝行 竈神、菩薩は天帝に奏上し  
玉皇見奏龍心喜 封他一門上天昇 玉皇は奏文を見て喜び 彼ら一門を昇天させることに  
した

却説玉皇見奏未知天上有何星宿下凡。便差太白星君到十万八千星斗之中查来。那太白領旨。逐到星斗之中。細細查明。单少了一个遊嬉神仙。瞞著私下凡界。玉帝道。本該罰他要千刀万副之罪。如今他在凡間遭過早荒。已竟罰他千刀万副之罪。到也罢了。又難得他割股救娘。恕他無罪。如今収帰原位。(訳：ところで、玉皇は奏文を見たが、いったい天上の何星が下凡したのか分からなかった。そこで太白金星君に十万八千星の中から調べさせた。太白金星は旨を受けて、星を詳細に調べると、たった一つ遊嬉神仙が欠けており、だまって勝手に下界にいていた。玉帝は、遊嬉神仙が割股療親をしたのに免じて勝手に人間界に投胎して過ごした罪を赦し、元の身分に戻した。)

『葵花宝卷』の孝女孟日紅は、じつは慈善仙女の生まれ変わりで、投胎するまえは玄女娘娘の召使だった。それが、高榮という富裕な員外と妻の楊氏が子供がなかったので、善行を積んで子供を授けてもらおうと、楽善堂を作って貧民救済にあたっていた。玉帝は高榮の善行を認め、どの仙人を高家に投胎させればよいか探させた。太白金星が一对の金童と玉女を推薦した。それは、蟠桃大会に参加するため一人の金童と一緒に瑤池に向かうと、南山の前でちょうど九天玄女の一同と出会ったが、その玄女娘娘の仙女たちのなかに慈善仙女がおり、金童とその慈善仙女が微笑みあっていたので調べると、じつはかれらが五百年前に俗心を起こしたため、今後まだ七日間の夫婦生活ののち別れるという練磨を受けなければならないと分かった。そこで、金童は高榮の家に投胎して連科及第させて善人の陰徳に報いさせ、玉女は麻城県西街の孟聖夫婦が仁徳のある善人なのでそこに降臨させることにした。投胎した孟日紅と高愷は、因縁どおりに七日間の夫婦生活の後、高愷の試験のために離れ離れになり、残された孟日紅は貧困の中で病気の姑に割股療親をする。

『女延寿宝卷』では、子無しの善人ト員外の善行に感心した玉帝が、宮殿の侍香使女を娘・素玉として投胎させる。使女とはいえこれは天界の仙女である。素玉が十一歳になったときに父が重病になり、あと七日の命と医者に宣告されると、素玉は左臂上の肉を割いて湯藥と煎じて食べさせるが、思いがけずますます病状は悪化した。そこで、素玉は再び右臂を割くことを試みる。すると今度は死んで魂は冥府に行ってしまうが、東嶽大帝の取計らいで還魂し、父への割臂療親を成功させる。

前世が神ではなく、ふつうの人間であった者でも投胎して、股や臂を割いて親の病気を治療す

る孝子や孝女になる。

『延寿宝卷』では、生前も一般人であった善人の魂を、これも善行を積んで跡継ぎを願っている長者夫婦のもとへ神が投胎させる。しかし、この魂は生前、三宝に帰依しておらず生臭を好んだので、投胎後の寿命は九歳までと決められ、金本中としてすくすく成長する。ちょうど9年経って両親が重病にかかり手立てがなくなると、金本中は腹を裂き心臓を抉り出して冥府へ行ってしまう。ところが、孝心厚い金本中に感心した閻王が玉帝に奏すと歡喜して、割心に免じて金本中自身へ十年の延寿と両親へ百歳までの長寿を賜った。金本中を陽界に還魂させると、金本中は息をふきかえし、抉り出した心臓を薬と煮て両親に食べさせ、2人の病も完治する。『八宝延寿卷』も一般人の魂を、祖先が悪人だったためにその報いを受けて子がいまだにできない善人夫婦に投胎させるのは同じ。

こうして股や臂を割いて親の病気治療をする孝子や孝女の因縁を見ていくと、必ずしも前世が神仙であることを必要とされているわけではない。一般人の魂でもふたたび現世に投胎して、そこでの苦難を乗り越え、善行を積み、菩薩になって昇天できると説く。民衆は、割股療親する孝子や孝女は特別な人ではなく、投胎した現世をまじめに生き、ふとふりかかった身内の病気のために割股療親をし、その至誠が神を感動させることが出来れば、神明からの応報は必ずやよいものであると理解したであろう。

## 六 結び

中国の民間医療として唐代以降盛んになった割股療親という風習が、清代になって女性の実践者数が増加し華中地域で盛んであったことと、同時代に同地域で普及していた説唱文芸の一つである宝卷の影響を念頭において、宝卷における割股療親説話の描写を分析しながら、当時の民衆の割股療親に対する受容態度が肯定的であったことを考察した。宝卷にみられる割股療親説話は、この行為を全面的に賛美し、大孝であると述べる。多くの神明はかならず割股療親する孝子や孝女に味方をし、割股を示唆し、遂行に協力し、傷ついた肉体を保護修復する。このような筋書きの物語が、宗教的な雰囲気の中で語られれば、神々や鬼の存在を深く信じていた当時の女性達は、割股療親をけっして悪いものだとは考えなかつただろう。魯迅が『狂人日記』で「母も、それがいけないとはいわなかつた。」という狂人の妄言は、狂人の口を借りて当時の世相を風刺していたととれる。「子供を救え…」というラストの狂人のつぶやきが示すとおり、魯迅は割股療親をよいこととは考えなかつたし、そうした風習に次世代の子供たちが染まらないように願ってこの作品を書いた。魯迅の割股療親を否定する態度は清朝以来少なからぬ世間の女性達が、宝卷を聞くことを通じて、割股療親する主人公に共感や感動を覚え、それが偉大なる親孝行であるとして肯定的に受容したためであったと考える。